

## 北海道戦後開拓史に関する資料

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学農学部 公開日: 2011-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寺田, 由永 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/10161">http://hdl.handle.net/10291/10161</a>

## 北海道戦後開拓史に関する資料

On the books about the history of the post-bellum  
reclamation of waste lands in Hokkaido

寺田由永

Yoshinaga TERADA

一

第二次大戦終了の昭和20年から22年までに、わが国の人口増は実に621万8,000人におよび、その結果総人口は7,862万7,000人に達した。この増加人口の70パーセント455万7,000人が引揚者であった。この人達は従来海外にいたのであるから、その引揚は当然各方面に人口圧となって波瀾を巻き起す。食糧の需給関係が特に強い影響を受けた。それまで国内の米生産高は大体6,000万石で、さらに朝鮮、台湾から約1,000万石移入して、需給のバランスをとっていた。そこへこれだけの人口増であるから、当然そのバランスは崩れてしまう。

加えて終戦の年の20年は未曾有の凶作で、米の収穫高は実に3,900万石という惨状であった。敗戦の混乱に追い打ちをかけるようなこの凶作によって、深刻な社会不安が襲う恐れが濃厚になって来た。政府はもちろん、占領軍当局もまた、深い憂慮のうちに対策の早期樹立を迫られたのである。昭和20年11月の閣議決定「緊急開拓事業実施要領」は、こうした背景の下に出されたものである。

この「要領」の示す方針によると、開拓政策は「終戦後の食糧事情および復員に伴う新農村建設の要請に即応し大規模なる開墾、干拓および土地改良事業を実施しもって食糧の自給化をはかるとともに離職せる工員軍人その他の帰農を促進せんとす」るものであった。その背景からして当然の趣旨というべきである。同時にまたこの政策は、さらに積極的に、経営規模の適正化をはかろうとする趣旨をも、含んでいたとみられている。(柏祐賢「農業政策論」昭和37年、養賢堂、197ページ。)

この事業計画は当初極めて大規模なものであった。その内容を概観すると、6カ年間に165万町歩の開墾、干拓、3カ年間に既耕地の約36パーセント、210万町歩の土地改良を実施し、5年間に100万戸を入植させ、10年後に2,100万石の増産をし、食糧の国内自給を実現する、というものであった。

しかしこの計画は過大で、目標の達成は困難であった。それでも27年度までに開墾面積は約50万町歩、入植戸数は約15万戸に達していた。さらになにがしか規模を拡大した農家は75万戸、土地改良事業補助対象面積は100万町歩を越している。しかし繰返すが、いずれにしても実績は目標に遠く及ばなかったのである。

その理由の一つに、用地取得の見通しが立たなかったという事情がある。開拓の用に供される未墾地は、占領軍の指令によって旧軍用地を第一に、その他国有未墾地、国有林、御料牧場などであり、その後民有未墾地に及んで行った。しかしそれら開拓地の取得には、それなりの法的根拠が必要な訳で、当時進行中の農地改革、現実には第二次農地改革の推移如何が問題であった。

その他各種施策、制度が整備されるにつれて、現実には開拓地の取得が進み、開拓事業が推進されて行く。たとえば農協法の制定に伴って開拓農協が設立されたが、これは開墾、建設、営農指導、融資等々の開拓施策の受入れ、もしくは実施主体として、開拓農民だけで構成されたものである。あるいは自作農創設特別措置法の制定があり、これが開拓用地取得の根拠をなす法律である。また開拓農家に資金を融通する開拓者資金融通法の制定、各種規範—開拓適地選定基準、地区開拓計画の樹立要領、開拓地営農類型等—の設定等がある。なお民有未墾地の取得は農地調整法の改正によって始まったが、手続きが複雑であったなどで、自作農創設特別措置法の制定以後本格化した。

ところで戦後の開拓に向けられた用地は、戦前、戦中既に農耕地として利用し尽されて、しかもなお残った耕境外の土地で、極めて劣悪な条件をもった土地というべきである。従ってそれらの土地は、多額の投資によって条件改善を行わなければ、農業経営の成立する可能性の薄いものである。そこへもってきて、緊急開拓による入植者は、多くが農業と無縁の、たとえば戦災者、工員、引揚者、復員軍人といった人達で、しかも入植予定地について科学的調査が行われ、それに基づいて地区開拓計画が樹立され、建設工事等の基本的事業が完成された後に入植した訳ではなく、とにかく入植が先ということで現地入りした人達である。

それであるから、敗戦による混乱がおさまるにつれて、開拓を断念し、離農する者が相ついで行った。こうして去る者は去り、残る者は残って戦後30年を経ると、激動の30年の風雪に耐え生き抜いた農家の生活は、多くが深く大地に根をおろして、経営もまたほぼその基礎を固めたようで、もはや開拓農家というように分別する必要などないように見える。しかしそれらの農家の中には、本州の農家と同じように後継者難、兼業化といった問題に脅やかされ始めているものもあるようである。

すなわち戦後開拓地は、ほぼ30年を経過した今日、一つの転機に遭遇しているというべきであろう。開拓地の人達自身そうしたことを身をもって感じているようであるし、また行政の側でその衝に当たって来た人達も、その人なりに今日の状況にある種の感慨を抱いている。そうした感情の高まりが結晶し、今日各地に記念誌の編集、発行が進められている。

54年8月末、筆者は戦後開拓の現状を調査のため北海道に飛んだ。根釧原野を中心として、併せて苫小牧周辺鶴川町にまで歩を進めたが、その変貌ぶりに驚くばかりであった。根釧原野の景観などは正にアルプス以北欧州のそれに酷似し、数年前訪れた南ドイツはバイエルン地方の印象が、鮮やかに蘇って来たものである。集って下さった農家の方達は、顔に深い皺を刻み込んではいが、その表情は安らかで、苦労話でさえ楽しそうに語ってくれた。

それは確かに一仕事し終った人達の顔である。同時にその人達は、今後どうすればいいかに迷っている。根釧原野は酪農経営を確かなものにした。そう思いたいが、牛乳の過剰問題は楽観を許さない状態にある。経営方式にも問題がある。新しい問題が次々に起ってくる。このようなとき、過去をふり返り、これまでの苦労を噛みしめながら新しい進路を見出して行く、これはまことに意義深いことではなからうか。

この調査行で、筆者は数冊の開拓史、町史、事業史の類を入手した。多数の資料と共に個人的に寄贈されたものであるが、御厚情に感謝しながら、それらのうちの若干について、その概略を紹介することにしよう。

## 二

北海道戦後開拓史編纂委員会編「北海道戦後開拓史」北海道、昭和48年4月1日。

本書は全体765ページにおよぶ大著で、北海道における戦後開拓史の全貌を知るための、ほとんど唯一の資料ではなからうか。なおこれは通史であるが、大量豊富な原資料を用いて書かれている。しかしほかに、関係する年表、重要通達、統計等は、「資料編」として別に刊行された。(48年12月25日)

さて本書刊行の目的は、戦後28年余にわたる北海道の戦後開拓政策が収束の時を迎え、「開拓者の苦闘の歴史を後世に伝え、本道農業の重要な位置を占めるに至った戦後開拓事業の意義を明らかにする」(発刊にあたり)北海道農地開発部長 上村重信) ことにあった。45年度当初予算に発刊経費が予算化され、開拓事業の収束対策にあわせて、45、6年の2カ年で完成する予定で計画がたてられ、作業が進められたが、「四半世紀余の長期にわたる内容だけに、度重なる庁舎の移転等により資料も散逸し、各時代の業務に直接たづさわった職員も交替した者が多く、その後の担当者が多忙な本務の傍ら資料を蒐集整理しながら執筆せざるを得なかった等」、多くの困難を免れなかったようである。こうして予定より1年遅れて発刊された本書は、「内容の精粗・表現の不統一などをまぬかれず、また一貫した史観のもとに充分推敲するいとまもないまま刊行に踏み切らざるを得」なかったとはいえ、淡々と事実経過が記されている本書の行間には、無から有を生じた開拓者の苦闘のあとが、鮮かに刻み込まれているのである。

さて次に、本書の内容について若干の紹介を試みよう。本書は本文6章から成り、それに論説

2 篇、「開拓地を訪ねて」2 篇が付けられてある。6 章の構成は次の通りである。

## 第1章 総論

## 第2章 開拓用地の取得

## 第3章 開拓地の建設と入植

## 第4章 開拓営農の展開

## 第5章 開拓農民組織と関係団体

## 第6章 開拓の収束

総論ではまず開拓史時代から終戦までの北海道開拓の歴史を述べ、この時期は「開びやく以来府県の河川流域平野部を対象に連綿として展開されてきたアジア型の零細稲作農業が、はじめて海峡一つを超えて府県とは基本的に条件の異なる本道で新しい課題ととり組まざるを得なかった」時期であるとし、したがって戦前の開拓は、「約70年という歴史の流れを通じてもおお解決し得なかった基本課題を戦後の開拓に引き継いだものと」みている。(26ページ。) ついで20年から40年までの戦後開拓にはいり、緊急開拓から高度経済成長期の開拓まで、いわば激動の時代について概略を述べている。なかんづく冷害恒久対策としての家畜の国有貸付制度の確立を通じて、「酪農経営が本道開拓の特色として完全に定着」するに至ったとの指摘に注目したい。本章第3節は戦後開拓の収束について述べている。38年に開始、以後7年間継続された第2次新開拓営農計画振興対策によって、「入植後長年にわたって培われてきた開拓農家の潜在的な発展力が、」 「漸く開花期」に向ったとか。(54ページ。) こうして43年に対策が完了、開拓行政は終局を迎え、収束対策が展開されて行く。

以上の総論、概説をうけて、第2章以下は戦後開拓の実態を詳細に記述している。開拓にはまず何よりも用地の取得が第一であるが、第2章がそのことについて、開拓地の立地条件、開拓用地制度の推移、用地の取得・管理および売渡し、開拓用地をめぐる諸問題の4節に分けて説いている。開拓地であるからといって、場所を選ばずということはない。にも拘らず終戦直後の緊急開拓時には、その点必ずしも充分ではなかった。開拓地の自然条件などは、科学的調査を行なういとまもなかったようで、特に飲料水の水源状況の実態は、ほとんど把握されておらず、開拓者の多くは水に苦しんだことであろう。そうした実態が誠に冷静な筆致で描き出されている。それに開拓地の社会経済的条件は、必ずしも開拓者にとって好適なものではなかった。24年に設定された「開拓適地選定基準」も、自然条件を主体に考えられており、その限りでは一応「戦後開拓が展開した対象地域は、全道にまたがり、それまでに形成されてきた農村領域の縁辺から、未利用山林、原野地域に拡大された広大な開拓適地」ということになる。しかしながら「現代経済社会における商品生産農業、および農民の生活が営まれる領域としては、交通手段をはじめ各種の施設に対する社会的資本の投入がなければ、その開拓者(人間)の定着が困難な地域が大半であった」とか。(76ページ。)

なお終戦直後本道の開拓目標は、16年道庁によって実施された土地利用状況総合調査の結果を基礎として70万町歩と定められた。20年9月調査では、農耕適地62万8,712町歩と出ている。(北大農学部学生を主体としたので「学生調査」といわれている。)さらに21年にかけて道は、全道開墾可能地124万1,251町歩を把握、それが23年の全国同一基準による調査で186万1,216町歩に改まり、28年に163万4,940町歩に再修正された。(84ページ。なお21年にかけて把握された面積は、当時農林省が、全国の開拓適地調査を行なうための目安とする開墾可能地面積を割り出す必要から、わが国土面積のうち、傾斜15度以内のものを1,588万町歩と推定、その60パーセント952万8,000町歩を開拓適地と見立て、その中から既耕地の584万4,000町歩を除いた368万4,000町歩をもってこれにあてたことに対応し、本道における開拓可能地面積として推計されたものであるとか。同。)

第2節に開拓用地制度の推移が述べられている。緊急開拓の段階では道独自の用地制度があったが、21年12月に自作農創設特別措置法が施行されてからは、開拓用地の取得はこれによって行なわれることになった。なお国有未墾地についてみると、北海道長官には、明治30年以来国有財産法の特例として北海道国有未墾地処分法に基づく国有未墾地処分の特殊権限が認められていた。それが22年12月の17万町歩の特定地貸付と330町歩の売払いをもって終了した。(93ページ。)その後は自作農創設特別措置法、農地法によって用地の取得がなされて行く。ところで開拓当初は取得の容易な国有林が主な対象とされたが、24年には国有地の比率が16パーセントに低下し、急激に民有地に取得が波及することとなった。民有地は戦時中人手不足から農地に植林してしまったところが多く、立地条件も良好で、当然それが買収の対象となった。しかし土地所有者(林業者)の反発が強く、対応に苦慮した時期もある。(128ページ。)その他既存農家との土地利用上の競合問題とか、自衛隊用地等との調整問題などが記されている。

第三章は開拓地の建設と入植について、かなり技術的なことが述べられてある。たとえば第1節には開拓方式の推移が書かれているが、戦後混乱期より試行錯誤を重ねながら、地区開拓計画の樹立にまでこぎつけ、やがて基本営農類型の策定から開拓パイロット事業に至るまでの経過が明らかにされている。第2節以下には建設工事、入植および増反、開墾と土壌改良などが続き、第5節にかの有名な根釧パイロットファームと篠津泥炭地開発について、事業の概要が述べられている。パイロットファームは画期的な新方式により、「従来の観念を払拭した概ね理想に近い」国家投資が行なわれて実現したものであるとか。(286ページ。)一戸当りの開拓投資額を比較すると、全道開拓者平均33年実績で合計110万3,000円、根釧パイロットファーム、床1地区589万1,000円、床2地区549万5,000円(何れも計画)と格段のひらきがある。なお農業基本法(36年)の施行に伴い「開拓パイロット事業実施要綱」が制定され、緊急開拓以来の戦後開拓方式に終止符が打たれ、以後方式は一変し、地区の規模により国、道、団体が行なう「開拓パイロット事業」制度に進展して行く。これらの事業はこうしてパイロットファームに端を発し、機械開墾と主畜経営の推進もまたそこに始るといふ訳である。(286~8ページ。)

第四章は開拓営農の展開である。営農といってもまず開拓地の生活環境—住宅、文化厚生施設、飲料水施設に始まり、営農と対策の推移では、緊急開拓時「営農」以前の状態から旧営農類型、新営農類型への、さらに新営農振興対策を経、有畜化が促進されてやがて大規模機械化実験農場が建設されて行く過程が、ほぼ過不足なく記されている。緊急開拓の時期はとにかく入植を急いだ訳で、その後も依然として困難な条件が続き、苦勞のみ多い開拓営農の実態がわかる。したがって30年代にはいと、しばしば「不振開拓農家」という言葉が聞かれるようになってきた。これは「単に不振な特定農家を指すものではなく、当時の開拓農家の全般にあてはまる代名詞でもあった。」(370ページ。)当時の道の調査によると、ほとんどの開拓農家は生計が立たず、道農家平均生計費1人当り6万円内外、エンゲル係数45~46パーセントに対して、開拓農家の場合は、4万2,000円、60~70パーセントという惨めな状態であったという。(370ページ。)

しかし40年代半ばになると、未だ全道平均には少し劣るが、1人当り家計費が全道農家22万4,600円に対して17万6,500円、エンゲル係数が33.7に対して37.4パーセントと、かなり差を縮めてきている。そしてしだいに、規模ならびに生産額において全道農家に比肩するまでになってきた。(586~7ページ。)しかしなお規模の拡大と生産性の向上をはかる必要がいわれ、「生産と生活が調和する豊かな地域社会の建設を旨として」、第三期北海道総合開発計画(自46年至55年)が事業化され推進されてきている。なお開拓農家は「農業後継率が全道平均を上廻り特に高校卒業生においてこれが顕著である傾向がうかがわれ、この状態から推測すれば開拓地のこれら若年層の間には、より近代化した北方農業を確立するために、世代を受け継いで本道農業に挺身せんとする、逞しい意欲がなお温存」されているようである。(590ページ。)

開拓に当って開拓農民の組織、ならびに関係団体の果たした役割は大きい。第5章にそれらが述べられてある。終戦後開拓は遅々として進まない。その窮境打開を期して21年10月、札幌で全道開拓者大会が開かれた。そこで日本開拓者連盟の結成に呼応して、北海道開拓者連盟の結成促進がはかられ、決議によりその発足をみたのである。この連盟はねばり強い政治運動を展開し、数々の成果を挙げている。また開拓農協の役割も大きかった。22年11月の農協法施行に伴い、23、4年頃にかけて開拓農協が急速に設立されて行く。開拓農協設立の動機は必ずしも単一でなからう。それはともかく、開拓には莫大な国家資本の投下を必要としたが、各種補助金、開拓者資金(開拓者資金融通法、22年1月)の受入窓口として、その設立が急務であったこと、開墾、建設、生産、生活のための協同体として、その育成が必要であったこと、こうした行政サイドからの要請があったことは否定できない。一方開拓農民自身の方でも、一般農民との違いを自覚し、環境を同じくする同志による独自の組織をもととする意欲が強くなった、ということもある。(606ページ。)こうしたいきさつがあるため、一般の総合農協とは異なる専門農協の一つではあるが、他の専門農協と違い金融業務を営むことになる。

このようにして展開された北海道開拓も、やがて収束の段階を迎えることになる。第6章がそ

の過程を明らかにしている。開拓農家の所得も向上してきた。旧開拓制度による開墾、建設等の各事業も、「それぞれの成果を得て概ね完了に近づき、開拓収束の気運も次第に昂ってきた」のである。(654ページ。) こうして開拓農家は、しだいに一般農政の対象に組み込まれて行くことになる。したがって法的にも組織的にも、そのための移行措置が必要となり、その進行によって30年近い開拓の歴史が終ろうとしている。

以上本書の内容を概略紹介したが、多くの重要部分を省かざるを得なかった。短期間によくこれだけのものをまとめ上げたものだと、その努力と能力とにただ敬服するばかりである。したがって批評がましい一言も述べようとは思わない。編集、執筆に当たられた方々は、多くが開拓に従事した農家と何らかの関わりを持っているのかも知れない。極めて冷静に事実を述べられているのに、読む者には開拓者の汗の匂いが伝わってくる。本書はまさに、北海道開拓農家の顕彰碑として、永くその価値を維持し続けることであろう。

### 三

根室酪農史刊行会編「牛群雲の如し—根室酪農の歩み」雪印乳業株式会社、昭和50年11月1日。  
須田政美、松野幸雄監修、磯野覚治編集「根釧パイロットファーム開拓史」根釧パイロットファーム開拓農業協同組合、昭和50年11月1日。

別海町泉川郷土史編集委員会「別海町泉川郷土史—風蓮川源流を拓く—泉川のあゆみ」別海町泉川郷土史編集委員会、昭和50年11月3日。

創立30周年記念史編集委員会「あしおと—創立30周年記念史」計根別農業協同組合、昭和53年10月。

鶴川町史編纂委員会「鶴川町史」鶴川町、昭和43年11月20日。

先の四著は根釧原野開拓関係資料の一部である。もちろんこれ以外にも、地域内市町村を個別に当れば、それぞれ町史、農協史、開拓史の類いが多数刊行されているに違いない。また現に編集集中のものもある。それ程に今この辺には、歴史編纂ブームが起っている。「北海道戦後開拓史」にもあったように、戦後開拓も収束期を経て、開拓村も一般農村となり、開拓政策の終焉によって一般農政の対象となってきた。この時に当り、戦後の苦しい開拓時代を記録に残そうとするのは、これ実に人情の常というべきで

あろうか。

こうして開拓期を過ぎてみると、北海道農業もなかなかバラエティに富んでいる。そうした状況は既に43～4年頃に現われている。前出「北

第1表 開拓農家経営形態の状況

(戸, %)

酪農	酪畑	畑	田畑	田	その他	計
7,436 (47.8)	652 (4.2)	2,765 (17.8)	821 (5.3)	2,663 (17.1)	1,226 (7.8)	15,563 (100.0)

備考(1) 「昭和44年度、開拓地営農実態調査」「北海道戦後開拓史」559ページより。

(2) ( )内は全戸数に対する構成比である。



第2表 全道農家経営形態の状況

(戸, %)

酪農	混同	畑作	田畑	田	計
22,585 (16.4)	11,734 (8.5)	31,278 (22.7)	14,251 (10.3)	58,223 (42.1)	138,071 (100.0)

備考(1) 「昭和43年度農業基本調査・商品生産農家」  
「北海道戦後開拓史」560ページ。

(2) ( ) 内は構成比である。

第3表 地帯別開拓農家経営形態の状況

(戸, %)

	酪農	酪畑	畑	田畑	田	その他	計
道央	634 (8.5)	95 (14.6)	1,141 (41.3)	518 (63.2)	2,324 (87.3)	206 (16.8)	4,918 (31.6)
道南	1,138 (15.3)	205 (31.4)	497 (18.0)	263 (32.0)	225 (8.4)	393 (32.1)	2,721 (17.5)
道東	4,333 (58.3)	338 (51.9)	1,093 (39.5)	24 (2.9)	22 (0.8)	545 (44.5)	6,355 (40.8)
道北	1,331 (17.9)	14 (2.1)	34 (1.2)	16 (1.9)	92 (3.5)	82 (6.6)	1,569 (10.1)
計	7,436 (100.0)	652 (100.0)	2,765 (100.0)	821 (100.0)	2,663 (100.0)	1,226 (100.0)	15,563 (100.0)

備考 第1表と同じ。

海道戦後開拓史」によると、全体としては酪農が48パーセント近くを占めているが、その他畑作もあるし水田稲作もある。開拓だけでなく全農家ということになると、水田稲作の方がほぼ42パーセントで、酪農の比重は畑作を下廻る。北海道農家という

酪農、畑作をいい勝ちであるが、それは誤解であり、稲作作付制限時代を迎えた北海道農業の苦悩の程をうかがい知ることができる。その経営形態も、もちろん地域によってかなり違う。開拓地は酪農が多いというが、酪農家が過半数を占めているのは道北、道東

で、道央は水田稲作が主で、道南は酪農家が半数程あるが変化もある。苫小牧に隣接する鶴川町などは、明治25年50アールの米作りに始まり、今では約2,600ヘクタールに及ぶ美田が、鶴川の沿岸にひらけ、胆振の米どころとして鶴川米の名を高からしめている。(「鶴川町史」442ページ)

道東は酪農中心の畑作地帯で、本州で北海道を想うときのイメージこそ、まさにこの道東は根釧原野のものといえよう。筆者は昨年北海道の初秋に当たる8月末この地を訪れたが、根釧原野のド真中ともいべき位置にある開陽台に案内され、展望台に立って四周を見渡した時、一瞬ある種の錯覚めいたものに襲われた。数年前になるが、アメリカ、ブラジル、アフリカ、ヨーロッパと、世界の農村を見て歩いた時、ドイツのバイエルン地方で農村の美しさに目を見張ったことがある。それは正に、森と湖と草原に遊ぶ牛群が描き出す大パノラマであった。それが今眼前に展開しているのではないか。そしてこの景観は、その旅行の第一歩を印したアメリカ北部にあるウィスコンシン州の景観にも、また何とよく似ていることよ。ここもまた森と湖と牧草地に遊ぶ牛群に彩られ、美しい緑の世界である。バイエルンのミュンヘン、ウィスコンシンのミルウォーキー、そして北海道のサッポロ、その札幌と緯度を同じくする根釧原野が、景観を同じくしても不思議はない。

ここに掲げた5冊のうち前4冊は、この根釧原野の戦後開拓史に関わるものである。「鶴川町史」は文字通りの町史で、必ずしも戦後に限らないが、しかし戦後開拓はここでも同様で、中でも水田の開発が進んでいた。昭和2年1,427ヘクタール、11年1,981ヘクタール、24年1,665へ

クタール、現在は約2,600ヘクタールである。(鶴川町史]493ページ。)そのためここに、参考として書名を掲げた。

「牛群雲の如し」は根室酪農の通史ともいべきものである。発行が雪印乳業であるが、当社と根室酪農、北海道酪農とは深い関わりがある。雪印乳業は大正14年5月17日、「農民自らの牛で生乳を生産、自らの手で加工、自らの手で販売する」というスローガンを掲げ、北海道を日本のデンマークにしようとの理想のもとに発足した、有限責任北海道製酪販売組合に始まる。翌年3月28日、北海道製酪販売組合連合会(酪連)に改組、その酪連が根室地域に進出、根室工場を開設したのが昭和4年9月1日である。(「牛群」123ページ。)

当時幾つかの製乳会社があり、中でも北海道煉乳株式会社改め大日本乳製品株式会社(大乳社)が有力であった。昭和2年以降乳製品市況が芳しくなく、大乳社は生乳、クリームの価格を引き下げ、さらに従来無料で還元していた脱脂乳1升につき1銭を要求した。このため根室酪農は一頓挫を来す結果となった。この時生産者の要請もあり、酪連自身有望地に分工場設置の意図があって、4年7月29日黒沢専務の根室入り、12年11月6日根室工場落成となった。(同、123~6ページ。)酪連と大乳社との鞘当てなど興味深いのが、もちろんこれ以外にも、根釧原野の各地に製酪販売組合が組織されていた。いずれにしてもこうしたいきさつで、雪印乳業が創立50周年を記念して本書を出版した。本書の構成は次の通りである。

全体8章から成り、史実を正確に記録するとともに、それを裏付ける思い出をも収録する、という編集方針が貫かれている。戦後の部分は2章、約100ページにわたっているが、根釧原野に酪農が大発展して行く状況は、概略これを把握することができる。なお根室酪農の基礎を築いた転機は、昭和8年に実施された根釧原野農業開発五カ年計画で、この計画をもたらした6、7年の大凶作と計画実施に結集した官公民の総合力の全貌を後世に伝えるため、「計画」実施についての精しい記述がある。(同、406ページ。)いずれにしても本書は、明治以前から明治大正、昭和と、市町村や団体の協力、雪印乳業の力を結集して資料集めをしたらしく、この種のものとしては堅からず、しかも十分資料の裏付けをもつ好著で、根釧原野酪農史入門書の一つとして、まず初めにあげることのできる書物である。

ところで戦後の緊急開拓はどこまでも「緊急」対策で、「戦後の混乱と国民食糧の自給を解決するべく開始された緊急開拓政策による入植営農は、人畜力が主体であり、その営農確立のためには長い年月にわたり多大なる苦難を開拓農民に与え、この成果もなかなかして目的を達し得ぬままに多数の開拓農民が脱落するのやむなきに至った。」(根釧パイロットファーム開拓農協組合長理事 妻沼忠一氏による「根釧パイロットファーム開拓史」の「あいさつ」より。)

ところで戦後開拓で北海道が入植を許可した戸数は、延べ4万5,365戸といわれているが、開拓営農実績調査から推測すると、そこから9,000戸控除した約3万6,000戸が入植営農をした実戸数ではないか、といわれている。(「戦後開拓史」537ページ。)表をみると戦後入植者は大部分が28

第4表 時代別にみた入植と定着の状況  
(戸, %)

昭和年	20~23	24~28	29~32	33~	計
入植(A)	22,534 (49.7)	13,781 (30.4)	6,383 (14.0)	2,667 (5.9)	45,365 (100.0)
現在(B)	5,654 (36.3)	4,949 (31.8)	3,152 (20.3)	1,808 (11.6)	15,563 (100.0)
B/A×100	25.1	35.9	49.4	67.8	34.3

備考(1)「戦後開拓史」538ページ。

(2) 現在とは45年(推定)のことである。

日本経済は、戦後復興をおわり、さらに急速な成長段階に伸長しようとする時期で、開拓はむしろ農業政策も一転機を迎えようとしていた頃であり、北海道はことに開発前線地帯〜きわめて広大な〜として、その新たな方向づけを模索し」ていたのである。「根釧パイロットファーム」1ページ。) 28年冷災害のあと29年には泥炭地のフランス調査団、農地開発の世銀調査団、FAO調査団、これに前後する農林省、開発庁首脳部の視察調査団の入道で、根釧、天北、石狩泥炭地、勇払原野等未開発地域に対する調査が活発化した。こうした中で根釧原野が、酪農適地として着目され、石狩篠津原野とともに、世銀の融資対象にとりあげられたのである。「戦後開拓」271ページ。)

「根釧パイロットファーム開拓史」はその創初期のあれこれから、その後の過程、迂余曲節について詳しく述べている。その内容をみるに、全体を3篇に分け、第1篇は根釧P.F.の誕生と成長、即ち歴史について、第2篇は根釧P.F.開拓農協について、そして第3篇は組合員についてである。各篇の内容を詳しく紹介する余裕はないが、653ページにおよぶ豪華本の大著で、貴重な資料を大量に駆使した本書は、それ自体副題にいう「酪農近代化の担いで達」の、辛苦と栄光の証しとでもいうべきか。以下に若干その内容についてみることにしよう。

第1篇は序をうけて第1章で調査計画と建設工事について述べている。北海道開発当局の担当した事業の経緯と、実施状況を振り返ってみている。世銀調査団の意向で、機械開墾の対象は根釧地域とされていた。当時既に開拓計画地区が幾

つかあったが、選定基準を設け種々検討の結果、床丹第1、床丹第2地区が選定され、両地区合計1万0,541.5811ヘクタールの用地取得が進んだ。第2章は入植と営農についてである。入植戸数は第5表の通りで、入植、営農計画とも変更を重ねている。元釧路開発建設部根釧事業所初代所長 河村 勝氏は、「この地区(注、床丹第2地区)の建設工事の主体をなすものは道路工事で(明渠排水、防風林などの工事もあったが、金額としては少い)、その道路工事費の主体が砂利運搬費でした。根釧の平原には砂利の採れるところが無いので、遠い標津町の奥から採取しましたが、ト

年までであるのに、定着率では早い時期程低い。28年からは冷災害続きで離農が進み、さらに35年から再び離農が増加するが、後者の方は、開拓営農振興対策の一環として実施された、離農助成対策の影響もあったようである。

それはそれとして、「昭和30~31年の

第5表 根釧P.F.の入植経緯

(戸)

	計 画	総入植	離 農	未入植	現 在
床丹第二	195	187	27	8	160
床丹第一	264	174	13	90	161
計	459	361	40	98	321

備考「根釧パイロットファーム」61ページ。

トラックの1日運搬回数が2回弱で小石1個が鶏卵1個位の価格になったでしょう」と述べている。(同、64ページ。)巨額の事業費を要したことがわかる。続けていう。「この地方の土壌は、雨の後など湿りが強くなった時に車輪が軟弱地盤をこねまわすと、ヘドロになり」と。土壌条件の悪さが眼に見えるようである。

根釧P.F.は機械開墾による大規模開発を本命とする。第3章は農地開発機械公団北海道支所の創始期から、機械開墾の展開を述べている。公団は日本の未利用地開発に対する世銀の援助計画に端を発し、農地開発機械公団法に基いて昭和30年10月10日に発足した。北海道支所は31年4月22日、別海村中春別に設置されている。第4章は地域開発と根釧P.F.についてで、別海町と別海町農業共済組合に分け、地域発展の経過、ならびに共済組合の創立とその後の状況について精述している。別海町は31年9月17日、根室内陸地域として中標津、標津とともに集約酪農地域に指定され、ホルスタイン、ジャージー牛地域として優先第一位で決定された。こうしてジャージーがオーストラリアから入ってきた。31年338頭、そのうち別海町には211頭で、35年までには別海町の合計が1,168頭、うちP.F.分609頭に達した。このジャージー群に、家畜法定伝染病の牛ブルセラ病が発生した。別海町でも43年までに199頭が倒れている。

ととろで既に24年4月28日、当町に農業共済組合が設立された。しかし家畜の診療体制が整わず、獣医師も農開協に所属していた。31年4月から33年末までに、共済組合を主軸とした診療体制の統合が実現する。この共済組合がP.F.の発展を支える「陰の力」として働いてきたようである。「P.F.事業」と「開拓の歴史を振り返ってみるとそれは幾多の困難を乗り越えてきた開拓者の苦悩と試練に満ちた記録の累積である。」「ジャージー牛導入にからむブルセラ病の問題一つを見ても、切々として訴える開拓者の声が陳情書の中から聞え涙なくして読むことができない。……………P.F.の苦悩の歴史は乳牛の事故の多発から始まったと言っても過言ではないようだ。」(同、214ページ。)

第2篇は開拓農協についてである。入植者選定基準を通ったもの70名が、昭和31年1月から3月まで、新しい開拓法式的酪農について学ぶため、弟子屈町の釧路拓殖実習場に入った。その人達が基本計画についても検討、これが達成のために開拓農協を設立すべしとして、2月8日午後5時より、実習場会議室で第1回設立発起人会を開催した。第2回発起人会は2月24日午前10時より開かれたが、その時定められた「床丹開拓農業協同組合設立趣意書」(原案)に、開拓者精神の片鱗をうかがうことができる。若干の部分を次に掲げて参考に供したい。

「前略……当地区は、根釧原野P.F.入植者募集選定要領にあるように、私共の力のみでは容易に農業経営の安定を図ることは困難であるので、国・道、または機械公団等の援助と指導を仰ぐのでありますが、尚これで万全を尽し得たとは言い得ないのであります。言い換えればこれら諸機関の手厚い保護助成の上に、私共の努力が重なって自主営農体制を確立しなければなりません。

……………不毛の地とされた当地区に新しい村造りするに当り、各戸経営の安定は勿論必要欠くべからざるも

のでありますが、……………その安定を確保するには、各戸の有機的結合に基づく社会の建設が喫緊の要務…  
……………。

……………農業協同組合を設立し、これら諸機関の他力のみに依存することなく、諸計画の実施期間中に、この計画を自己のものとし、新農法の導入と、協同の力に依り不足分を補い、労働力の調整をなし、より効率的に事業の進捗を図らなければならない。」

31～35年が入植の時期で、36年を過ぎる頃になると、色々な問題が起ってくる。床丹第2区の1戸当り投融資額は362万円で、この三分の一は国の補助金である。なお地区内の道路、排水などの建設事業費も加えれば、1戸当り575万円以上の額となる。(同、251ページ、「戦後開拓史」所収 基本営農計画(抜粋)④資金投入状況(戸当り)273ページ。)ところで1戸当り200万円以上の政府資金の据置は5カ年で、償還期が迫ってくるがしかし、その可能な農家は10パーセントがせいぜいといわれた。(「根釧パイロット」254ページ。)

農家の不振は組合の不振に連る。かくして38年8月21日、根釧P.F.再建整備対策協議会が札幌市で開かれた折、組合再建整備について協議がなされ、9月28日第5回臨時総会においてその5カ年計画が成立した。こうした中で酪農専業化が進められ、今日では「北欧みたいな風景」が見られるようになった。(同、283ページ。)

第2章は各種事業の変遷について概観している。そして第3篇で組合員を第2区、第1区の順に紹介している。各事業に関連してさまざまな組織が作られているが、そうした組織、機関が、実は根釧P.F.の今日ある裏方であったのではないか、その間の事情がよく理解できるように記されている。さらにいえば、何にもまして要するに人の問題であって、入植離農を繰り返して残った人達は、いわば筋金入りともいうべく、1戸ずつ写真入りで紹介されている組合員の顔には、苦難を乗り越えた者だけがみせる、あの美しい微笑が浮んでいる。

以上「根釧パイロットファーム開拓史」の紹介を終るが、この根釧P.F.の例を見ていると、集中的に資本投下をすることによって、農業生産の場をかくも美事に変えることができるのだ、ということがよく理解できるように思う。わが国農業は山を開くべき運命にあるといわれているが、それは決して容易な業ではない。多くのことをこの根釧P.F.建設の過程に学ばなければならないのではないか。その意味で本書は、単に根釧P.F.の歴史を語っているだけでなく、多くの教訓を日本農業の将来に授けてくれているようである。

#### 四

以上の二著について掲げた三冊の書物は、それぞれ表記の地区の歴史を記したものである。「風蓮川」は別海町泉川地区の戦後開拓史である。別海町は前出の町で、根釧P.F.の存在で知られている。北海道は東北六県に新潟県を加えた程の大きさとか。別海町はまた県並み、泉川地区は府県の中の村並みという。実に広大な地域で、それを第1、第2、第3地区に分け、それぞれ

昭和23年、24年、26年から入植を始めた。風蓮川の源流に開拓の灯がともった記念すべき日が、23年3月23日という。

本書記載の沿革史は、こうしたことから書き始められている。目次を見ると沿革史に続いて“部落会のあゆみ”があり、それに“ずいそう”“思い出”が続く。こう見てくれば分るように、本書は決して、系統立って章節を分けた本格的な開拓史ではない。最後の“編集室から”にもあるように、「素人の編集」であり、「後日の史書作成に何らかお役に立てるように」という趣旨で編まれている。それだけにかえて、開拓の息吹が身近に聞えるようで、読み進むうち、さりげない行間に復員服姿の開拓者の、泣き笑いの顔が浮んでくる。

泉川第1地区は、もと軍馬補充部上川支部として、二才馬の放牧場であったとか。総面積は4,200ヘクタールで、その中に数ヘクタールの牧草地があり、他は樺、柏、白樺、ハン、タモなどの密林であった。その密林を分け、腰から胸までの雪の中、雪焼けて真黒になった復員服を着た若者が5人、風蓮川の源流の岸辺にたつ馬小屋にたどり着いた。これが前記23日のことである。（「風蓮川」14ページ。）

筆者が本書をとり上げたのには特別の理由がある。先の5人は山形班で、つづく北斗班、長野班、新潟班も、ともに満洲開拓の夢破れて入植してきた人達からなり、彼らはいずれも隣町標茶のの弥栄開拓団を指導していた中村孝二郎氏の導きで入植したものである。（同、13ページ。）この二つのこと、すなわち満洲開拓の経験者達による開拓であること、すぐれた指導者を得たこと、これが今日の泉川地区酪農を築き上げた重要な要因であることを、実は指摘したかったからである。終戦直後の緊急開拓で根釧原野に入った人達は、まるで荒野に投出された仔羊のようなものでなかったか。泉川地区に入っても、行政区域として標茶の管内なのか、別海なのかさえはっきりしなかったという。密林の中で満足な住居もない生活が、どんなに苦しいものであったか。資材も何もない中で、炭を焼いて現金収入を得ながら耐え忍んできた長い年月、無から酪農王国別海の一翼を担うまでに至った、この苦斗の歴史は、先の二つの要因を抜きにしては語り得ないと思う。そしてこの地区の歴史こそ、根釧P.F.の対極にある開拓史で、正に開拓者の歴史であるといえるのではないか。飾り気のない思い出や随想を読んでいると、かえてそのことがよく分る。

「あしあと」の方は計根別農協の30年記念史である。したがってこれは、直接開拓の歴史を書きとどめたものではない。しかしながらこの地区は、いわば根釧原野の真只中により、計根別市街を中心に中標津、別海両町にまたがる200km<sup>2</sup>におよぶ広大な地域で、大正15年、最初に23戸が入植した当時は、周辺地域がある程度開拓されていたのに、ここだけは50尺以上掘っても思うように水が汲めない、という状況の土地であった。（「あしあと」21ページ。）

計根別地区に乳牛が入ったのは昭和3年のことで、8年頃から馬鈴薯も盛んに作られるようになった。しかし全道からみるとこの地方の生産力は極めて低く、全道水準にやや近いのはソバく

らしいのもであった。しかしこの辺は軍馬育成の拠点として馬産が盛んであって、したがって軍関係による繁栄で、計根別市街が賑わったとのことである。敗戦はそれであるから、このあたりに深刻な虚脱感をもたらしたに違いない。

そうした間に周辺の未墾地、未利用地に開拓者が入植し、24年入植者49名を加え、農協管内戦後開拓者は155名に達した。それらの人達が周田の既存の農家にまじって、やがて根釧原野を酪農基地化する一翼を担って行く。その過程はすなわち計根別農協発展の過程で、両者はこれを切離して語るができないものようである。こうして52年度管内総農業生産額351億円(推定)のうち、農産物生産額は約7.2億円で、全体の約2パーセントに過ぎない。もちろん大部分が牛乳生産額である。農用利用地約99,000ヘクタールのほとんどが草地であり、農家戸数2,712戸(52年2月)、うち組合員戸数2,582戸(52年度末)、53年2月現在の乳牛飼育農家は2,425戸、乳牛頭数は12万3,160頭で、管内酪農家の平均的水準は、農地40ヘクタール、乳牛51頭、年間産乳量140トンである。(同、144ページ。)

日本の一大酪農地で、戸別規模はすでに北欧水準を抜いているという。(同、145ページ。)しかもなお55年度までに総投資額650億円にのぼる新酪農村建設事業(根室区域農用地開発公団事業)が進行中である。しかし経営規模拡大はこれ以上望みにくい。頭数をふやすことも、労働力の関係で容易でない。ただし乳牛改良、牧草栽培改良、大型機械導入等で経営の伸長をはかる余地がない訳ではない。将来は農協が哺育センター、肥育センターの施設を持つ必要が出て来そうである。農協乳業の工場も間もなく操業を始めるであろう。農協と共に歩む当地酪農の展望は、必ずしも悲観的なものばかりではあるまい。(同、153ページ。)

こうして古くからの開拓地の中の未墾地を開拓し、農協組織にはいつて酪農化して行った当地区の開拓者は、開拓P.F.とも泉川とも違った、もう一つのタイプに属するようである。どの地区に入るかは最終的には個人の選択によるものであろうが、しかしこうして根釧原野のあちこちに思いを馳せてみると、つくづく人間の運命なるものを考えさせられる。

以上根釧原野の戦後開拓史に関する若干の出版物を紹介した。その意味で「鶴川町史」は、今回その精細を紹介することはしないで置く。数冊を読んで後筆者の胸に湧き上がってきたのは、かの人達が開拓史を書かずにいらなかった心情への、深い深い共感であった。終戦直後の混乱、悪性インフレ、食糧不足のなかで、筆者なども元勤務していた大学の構内を耕して、鼠の尾っぽ程のイモを作って食糧の足しにした。勿論三度の食事にも事欠き、栄養失調に悩まされました。開拓地以外の人達の苦しみも、決して軽いものではなかった。しかし開拓地、特にこの根釧原野は多くが人跡未踏で、酷烈な自然条件のもとでの激しい肉体労働が、連日繰り返りひろげられて来たのである。そこでは強い肉体と精神が求められていた。それであるから、今日やや老境に入り、深い皺のある顔に微笑を浮かべている開拓者を見ると、樺の大木の年輪を見るようで美しい。

「戦後開拓史」以外は、全くといっていい程素人の作品である。従ってそれらは何れも、必ず

しも歴史の書としての体裁を整えてはいない。そのようなものにするためには、時代区分を明確にし、区分の必然性を説く必要がある。自分達の開拓にとって、そうした区分がどういう意味をもつかを、はっきりさせてから、内容を特徴的に記述して行くのでなければ、歴史の書としてはいささか物足りないことになる。しかし何れも、初めからそうしたことを望んでもいない。それはそれでいい。執筆者は誰もが、自分達のして来たことが歴史的にどういう意味をもったかを知るよりも、20何年かをふり返って大声で何かを訴えたかったに違いない。それにも拘らずむしろ声を押えてたんとんと事実を記している。そのためかえって、どの書物にも生きている息吹が感じられる。こうした書物を資料として、改めて歴史家が立派な史書を記せばいい。作家は小説を書けばいい。それらの人達の役に立つだけの内容を、どれも立派に備えている。そしてその中に盛られているのは、激動する戦後史の明暗を彩る、壮大なドラマなのである。